

振り向くとそこには青い眼をしたブロンド美人

デンマークハプニング

レポート：中野暢介

★ペンハーゲンを彷徨っていたときのこ

「何かお困りですか」振り向くとそこには青い眼をしたブロンド美人。時は平成 28 年 9 月 25 日 15:00 頃、場所はコペンハーゲン中心部の路上。今日は研修初日の午後、同じ職場の杉本とコペンハーゲンを彷徨っていたときのことだった。

「何かお困りですか」、返答をしない私に向かってブロンド美人は日本語で再び問いかける。

事実、私と杉本は非常に困っていた。なぜなら研修のオフを利用してコペンハーゲンにきたのはいいものの駅の場所が分からなくなっていたからだ。

しばしの沈黙のあと私は答える。「実は道に迷ってしまって駅の場所が分からないんですよ」と、そのとき私の脳裏に憶測が浮かびはじめる。

(これはいわゆる交際申し込みではないのか)、(勇気を出して声をかけてきた女性に恥をかかせてはならない)(しかし私は結婚している)(真剣な交際に発展する可能性もあるだろう)(離婚届は郵送でいいのだろうか、理由は？一身上の都合？いやそれは会社に出すものだろう)

★しかも流暢な日本語で

私の憶測をよそに彼女は話し始める。実は半年ほど立教大学に短期留学していたとのこと。日本語はその期間にマスターした(すごすぎ)。二人の男が日本語で道に迷った云々の話をしていたので、声をかけたとのことだった。

会話をしながらも私の憶測(妄想)は加速



<コペンで出会ったブロンド美人>

する。(デンマーク美女がたまたま話しかけてきた、しかも流暢な日本語で。これは偶然なのか、いや必然だろう！)(彼女は自分と話したがっている、ならば横にいる杉本は気を利かして適当に席を外すべきだろう、彼女が困っているじゃないか！)

平静を装いつつ、私は駅への道を教えてもらった。さらに勇気を出してツーショットの写真を頼んだ。もちろん彼女は快く引き受けてくれた。杉本は写真係。たまには良い仕事をするのではないかと思っていた矢先、杉本から信じられない言葉が飛び出した。

「私も写真お願いします」(あほか、彼女は一途な女性で将来的に私と結婚するのにそんな要望断るに決まっているだろう、空気を読めないのか！)。心底呆れている私の横で彼女は笑顔で即答した、「いいですよ」。崩れ落ちそうになりながら渾身の力を振り絞り、私はシャッターを押した。「トウケ(ありがとう)」

デンマークで初めて覚えた言葉を心から彼女に伝えた。その夜の酒量が増えたのは言うまでもない、そして体重も。本当に貴重な体験だった。